

とき

ね

秋の音



戦のなくならない世を、
若い坊主は嘆いていた。
まだ、薄暗い。
馬蹄が近づいてくる。

東雲八夫

秋の音

雪。日は、まだ出ていないように思う。薄暗い。若い坊主は、震える手で、箒を握った。寺の正面は、平地が続き、建物はない。昼間は、遠くまでよく見える。

地を掃く音だけが聞こえる。雪は地に落ちて、しばらくすると、溶ける。そこまで、寒くはないらしい。しかし、手は震える。

馬蹄。遠くから、響いてくる。近づいてくるが、姿は見えない。一頭か、二頭。

影。一人だけだ。肩の辺りには、矢のようなものが立っている。数本、突き刺さっている。真っ直ぐ、駆けてくる。

武者。おそらく、赤い兜。馬が、低い声で鳴いた。息は、白い。

「少し、休ませてくれ」

荒っぽい言い方だが、目は優しい。侍というより、裕福な商人のような顔立ちだ。だが、その目の奥では、何かが燃えている。

「お侍様。何も、ご用意できませんが」

「ただ、休ませて欲しいのだ」

言いながら、武者は馬から降りた。

血。滴る音すら、聞こえた。脇腹から、流れているようだ。武者は、なんでもないような顔で、馬を引いて歩き出した。坊主は、後ろからついていく。

寺の門をくぐろうとした時、不意に、膝から崩れた。

「お侍様」

若い坊主が、駆け寄る。誰か、来てくれ。そう、叫んだ。同じぐらいの年の坊主が数人出てきた。肩に手を回し、武者を担ぐ。目を閉じているが、意識はあるようだ。

地。赤いものが、門の外まで、転々と続いている。雪は、積もっていた。赤い斑点が、わずかに地から浮き上がって見える。

離れに運ぼうとしていた。

部屋の灯りがつき、腰の曲がった和尚が出てきた。近づいてきて、灯りをかざす。

「ひい」

武者を担いでいた一人が、腰を抜かした。若い坊主は、倒れかかった武者の体を支えた。

頭から、足の先まで血で汚れていたのだ。

武者の呼吸は浅い。やはり、目は閉じたままだ。

「もう、助からんだろう」

「わかっている」

武者は、落ち着いた声で、短く答えた。

一人が、ごぎを持ってきた。その場で、武者を寝かせた。

「何か、言い残すことはあるかの。お侍様」

「ない」

門を掃いていた坊主以外は、何処かへ行ってしまった。死んだら呼びに來い、ということなの

だろう。珍しいことではない。

坊主は、灯を置いて、武者の横に座り込んだ。灯に照らされた雪が、舞っている。

なぜ、ひとはあらず。若い坊主は、自問した。

一言。武者が呟いた。聞き取れなかった。人の、名前のような気がした。

「何度でも、死んでやる。だから、お前の首を俺にくれ。そうだ。一つで、いいのだ」

苦しそうな表情で、急に話し始めた。うなされている。誰かに、語りかけているのだ。

「なぜ、私の首が欲しいのだ」

若い坊主は、答えた。

「なぜだと？ わかりきったことを言うな。金だ。お前の首一つで、家族を養える」

「無理だ。畑を、耕せ」

「畑を耕して、金になるとでも思っているのか」

「死にはしない。人を殺してまで、家族を養いたい。小さな、器だな」

まくしたてるように、言った。だが、武者は何も答えない。

坊主は急に、残酷な気分を襲われた。

「人は、なぜ争う」

続けた。

「お前の言う、小さな器とやらはな。もう、あふれ出しそうになっているのだ。俺には守るべきものがある。全てを手に入れたお前の器は、どれほどに大きいのだ。俺の大切なものがあふれる前に、その器を、くれ。だが、半分に分けることなど、できはしない。それが、俺の戦う理由だ。お前には、わかるまい」

気が付くと、辺りは明るくなってきていた。門の近くにいた馬が、寂しそうに、鳴いた。

「俺は」

武者が、急に大きな声を出した。坊主は、驚いて、全身を硬直させた。

右手が動く。

斬られる。そう、思った。体は、動かない。殺されても、仕方がない。それで、この男は、満足して死ぬだろう。

歯を食いしばり、かたく、目をつむった。覚悟は、できた。

「来い。この首を、飛ばしてみろ」

声を張り上げる。

武者が、雄叫びを上げた。

斬れ。そう、思った。不思議と、恐れのようなものは、ない。

音。

それから、転がり落ちた。何も、聞こえない。どれほど、時が経っただろう。雪が、耳に触れる。死んではいない。坊主はゆっくりと、目を開けた。

武者は、空に手を伸ばしていた。微笑んでいる。ちいさな、髪飾り。武者の、胸にあった。